



TITLE:

人文 第1号

AUTHOR(S):

---

CITATION:

人文 第1号. 人文 1970, 1: 1-36

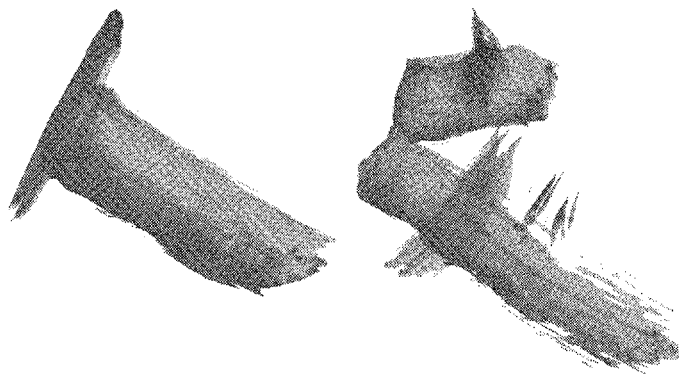
ISSUE DATE:

1970-10-01

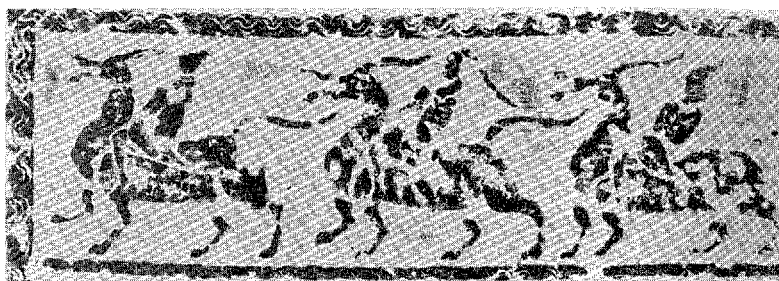
URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57127>

RIGHT:



第一号



1970・8

京都大学人文科学研究所

人 文 1号 もくじ

発刊のことば……………河野 健二 1

わたしの考え

国家形成と海……………梅棹 忠夫 2

書 評

藪内 清・吉田光邦 編

『明清時代の科学技術史』……………船越 昭生 4

河野健二・飯沼二郎 編

『世界資本主義の歴史構造』……………中村賢二郎 6

共同研究のうき

●大正・昭和初期の時代思想と世論／家族問題の研究／社会科学における電子計算機の利用／社会運動の研究

●辛亥革命研究／朱子研究／漢代文物の研究／天下郡国利病書の研究／白氏文集の校定／隋唐の思想と社会／敦煌写本の研究／類目委員会／漢籍委員会  
●異端運動の研究／文明の比較社会人類学的研究・アフリカ社会の研究・理論人類学研究／十九世紀フランス社会思想の研究／現代における知識の意味

旅

扶余への旅……………牧田 諦亮

アンナバーの留学生……………内井 惣七

〈講演〉

書いたもの一覽 (一九七〇年一月～六月)

〈人事〉

## 発刊のことば

研究所の「所内報」を復刊せよという声は、昨年来の研究所の改革論議のなかから出てきたものである。

人文科学研究所では、戦後の再出発に当って、私たちが「所報」と呼んでいたガリ版ずりの月刊のパンフレットをもっていた。その内容は研究所のメンバーによる随想を巻頭にのせ、共同研究班の紹介や公開講演の要旨、それに購入図書のリストや人事移動の記録までを盛りこんだ八ページから一二ページ程度の「所内報」であった。それは若干部数、外部の研究所や研究者にも配布され、かなり好評をえていたばかりでなく、所員の相互理解や相互批判のためにも有益なものであった。

しかし、研究所の体制が一応でき上り、所員（助手を含む）の活動が軌道にのったばかりでなく、その活動が多方面にわたるにつれて、「所報」の発行をつづけることは逆に次第に困難になってきた。原稿の集まりがわるくなったからである。編集委員や担当事務職員の献身的な努力がなかったら、もっと早く廃刊に追いこまれていたにちがいないが、とにかく五十一号までこちこたえて、ついに廃刊になった。前後、八年間つづいたわけである。

こうした経験があったので、「所報」復刊の提案が出されたとき、古くから研究所にいる人々のあいだではためら

いの空気があった。「読者としては賛成するが、執筆者・編集者としては疑問をもつ」と誰れかがいった。そこで「所報検討委員会」がつくられ、慎重な検討を加えていただいたのち、年三回発行その他の控え目な計画で出版することとなった。掲載事項や体裁についても改訂を加えたことは、本号に見られるとおりである。

昨年来、たびたび話題となったことは、研究所のメンバーが自分たち自身の仕事をたえず総括し、明確なビジョンをもって計画的に研究活動を進めることが必要だということであった。総括やビジョンの設定を説得的なたちで行なうことが、容易であるとは思われないけれども、しかしこうした「所内報」をもつことによって、研究者がたえず自己自身にそれを問いかける手がかりがえられることは確かであろう。私としては、研究所を構成するすべての人々が、この新たな出版をする「人文」を存続させるために手を貸して下さることを今から、とくにお願ひしておきたいと思う。

委員から求められるままに一文を草して、発刊のあいさつとしたい。

一九七〇年八月三日

京大・人文科学研究所長 河野健二



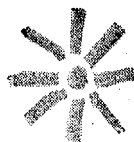
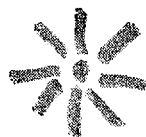
## 国家形成と海

梅 棹 忠 夫

われわれの生活は、石油採掘者みたいなところがある。このへんで見当をつけて、試掘をやってみる。試掘は、つぎからつぎへと、しょっちゅうやっているのだが、なかなかあたらぬ。ときどき大油田にぶちあたって、試掘井が猛烈に油をふきあげる。このごろわたしは、どうも油田にあたったようだ。全身に原油をあびて、さてどうしたものかと戸まどっている。硫黄含有量その他の検査はしていないから、でてきた油が良質かどうかはわからない。

はじめは、わが「比較文明論」の研究班にきていただいている石井米雄教授（東南アジア

研究センター）の著書『小乗仏教』からはじまった。センターでの合評会に出席し、書評を「季刊人類学」にかこうとおもった。東南アジアの研究は、ここ数年間は、むしろさけていたのだが、ひさしぶりに文献をしらべているうちに、情熱がでてきて、とまらなくなってしまう。小乗仏教も書評もわすれてしまつて、東南アジア諸国の文明的比較に熱中してしまつた。そして、東南アジア諸文明の形成に、ベンガル湾がはたした役割がひじょうにおおきいことに気がついた。古代におけるオーストラアジア系諸民族にはじまり、インド化された諸国家の形成、それに小



乗仏教にいたるまで、東南アジア文明は、要するにベンガル湾文明ではないか。これを、「ベンガル湾文明圏」の仮説ということにした。

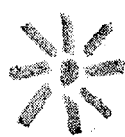
ところでいっぽう、上山教授の唱導のもとにおこなわれた「照葉樹林文化」のシンポジウムがまとまり、本がでた。やはり「比較文明論」研究班で合評をやったのだが、そのときわたしはまえから試掘をやっていた問題をぶちまけた。それは、日本文明の形成における日本海の役わりという問題である。縄文期においても、表の照葉樹林系の文化に対して、裏の落葉広葉樹林系の文化をかんがえねばならず、それは、じつは環日本海の的なものとして、東満州、沿海州につながる。歴史時代にはいっても、さまざまな事実が、日本海を仲介してむすびあわされて、一つの歴史的ゲシタルトをつくる。これを、「日本海文明圏」の仮説ということにした。

じつは、おもいもよらなかつたことなのだが、この二つの油田は、地下でつながっているらしい。ベンガル湾と日本海と、地理的位置はえらくはなれているけれど、試掘井から

噴出している油は、どうも同質のもののようなのである。

何をかんがえているかといえば、もちろん、一般論的にいえば文明の形成過程の比較研究なのであるが、特殊的にいえば文明の形成過程における海の役わりの比較研究である。さらに焦点をしなければ、「国家形成と海」の問題ということになるだろう。

海の油田の採掘は、技術的にはむづかしい点はあるが、だいたいどこの海でもおなじような方法でやれるのではないか。石油の礦脈のはしり方をもうすこしたしかめるために、黄海、東シナ海、南シナ海、ボルネオ海、アラビア海など、つぎつぎと試掘をつづけてみようかとおもっている。もっとも、試掘があたりすぎて、油の海であつぷあつぷすることになるかもしれないが、油田さがしに心をうばわれた以上は、もうゆくところまでゆくしか仕方があるまい。



本書は昭和四十一年四月以来、戴内清教授を班長として、進められてきた共同研究の成果を集録したものである。それは『天工開物の研究』（昭和二十八年）にはじまり、『中国古代科学技術史』（『東方学報』京都第三十冊專号、昭和三十四年）、『中国中世科学技術史』（昭和三十八年）、『宋元時代の科学技術史』（昭和四十三年）とつづくシリーズの最後に当るばかりでなく、さらに「ながい間中国科学技術史の開拓に尽力された戴内清教授の退官記念の意がこめられている」（跋文）もので、戴内教授はじめ、多年教授とともに科学技術史の研究につとめられた方々の論文十七篇を収載する。その内容は戴内教授の明清科学技術史導論にはじまり、およそつぎの如き三つのグループに分類される。

その第一は天文・暦算・科学思想の研究の類である。すなわち戴内清「戴震の暦算学」は、清朝暦算史上特異な位置を占める戴震の暦算研究の特色を基本的には西説の紹介ではなく、古典の天文記事の解釈にあると考え、彼の功績を古算書の搜集、復興にあるとする。今井澤「乾坤体義難考」は「乾坤体義」の数学的性格を評価しつつ、これがクラビウス（C. Clavius）の『サクロボスコ天球論注解』にも依拠することを明らかにし、その基礎的要素を分析した。橋本敬造「暦象考成の成立」は、清朝暦法の基礎に西洋天文学が存在することを雍正二年刊の『暦象考成』を例として指摘しながらも、

以後、この方向で中国天文学の進展がみられなかったことに注目し、その一原因として、中国における西洋天文学の受容があまりにも技術的にすぎた点を指摘している。坂出祥伸「万以智の思想」は「物理小識」に示される如く、

個々の事物についての普遍法則を探究しようとし、た方以智の目標を明らかにし、それに至るに「質測」と「通幾」という彼独自の在来思想を克服する方法が存したことを提示している。山田慶児「耶蘇会士の科学研究」

## の史 代術 時技 清学 明科

## 書 評

編 清邦  
光 内田  
吉 戴

は、在華耶蘇会士の活動を三期（一六〇〇年代初期—一六〇年代、一六六〇年代中頃—一七三〇年、一七三〇年以後）に分類しようこと、それがヨーロッパにおける科学の発展段階に相応じていることを説明し、ことに第二期のそれが形成期の近代科学を伝えるもので、これと中国側の要請に基づく改

暦・測地などの諸事業との関連に立って、はじめて彼等の活動の妥当な評価が得られると主張する。第二は本草学、ことに『本草綱目』の研究を主とする類である。岡西為人「明清の本草」は明清本草書の書誌を提示し、これを主流、実用中心、薬理中心、神農本草の復原などに分類してその性格を明らかにし、明清の本草が薬効に傾く医学的性格を濃厚に有している反面、基源の論に乏しいと評している。北村四郎「明清の植物名物学」は、名物学（Taxonomy）を分類学と規定し、呉其濬「植物名実図考」に代表される清代の名物学や徳川時代の名物学より、さらに現代のそれに言及する。田中謙二「薬名詩の系譜」はこの類では幾分特殊なものなのである。六朝の遊戯文学（人姓名体）のなから、十数世紀にわたって伝承された薬名詩をとりあげ、これ等長期にわたる伝承が行なわれた理由として、自然界の広い分野にわたる物象を網羅する本草が、詩の対象とする具象的なものを豊富にもち、表現上の技巧を弄するに便利で、一方実用として薬効の記憶としての機能があったこと等を論じている。木村康一「本草綱目内容の評価」は、従来の『本草綱目』に対する低い評価を裏付ける例を提示しながらも、李時珍以来の薬物を知るためには大切な典拠となることを強調する。宮下三郎「本草綱目の薬物分類」は、『本草綱目』が伝統的な薬性による三品分類を脱却し、生態・形態に基づく分類原理に立脚する点、自然分類の萌芽と認められることを力説し、その社会的背景にまで論及している。森村謙一「本草綱目の植物記載」は、『本草綱

目」が、開花・結実の様相を克明に捉えようとしている点に着目、その科学性を高く評価する。

第三は生活・生産技術の研究の類である。篠田統「近世食糧考」は、宋元時代より清朝に及ぶ食物関係の文献をわが研究所蔵の文献を基礎に解題したもので、随所に筆者の見識が溢れ出ている。渡辺正「明末清初における蔬菜・果実の渡来と受容」は、明末清初渡来の七種の栽培植物に関する研究で、サツマイモ・ジャガイモの名称の転変の事実など興味深い問題を論述している。相川佳子「明代の服飾」は、万暦中期の作品と考えられる『金瓶梅』を主材料に『明史』與服志『天工開物』等の資料を用いて、主役西門慶を中心に官吏・庶民・男女の服装についての研究を体系化している。天野元之助「明代の農業と農民」は、明代にもたらされた玉蜀黍・甘藷・煙草などの外来の植物による農産物の種類の増加と、水稻・麦・茶など基幹作物のヴァリエティの増加を示す諸資料が示され、優良品種の育成と伝播、品種の淘汰が行なわれた事実を明らかにし、農業の社会・経済的背景にまで論及した。吉田光邦「景德鎮の陶磁生産と貿易」は、もと宮廷の御用窯から出発した景德鎮の陶磁器が、ひろく南海・ヨーロッパ貿易に登場するあとを克明に追跡し、ことにその技術過程における青花磁器作成の際に用いられる染付材料、「蘇麻離青」が砒素を含有する

ことから、これを西方産と判断しており、世上有名な景德鎮製のものには中国産青料と輸入青料との混合物を用いていると指摘する。

以上で各論文の紹介を了え、つぎに本書全体を通じて気のついた二三の感想めいたことを書連ねておく。

第一は明清時代という時代区分に関する問題である。たとえばこの時期の著しい特色の一つは西学の伝来であるが、本書中でも述べられているように、西人の伝えた科学技術が、明末と清朝、ことに康熙以後とは、その有つ意味において異つたものであるとするならば、中国における対応の仕方やそれによる在来の文物への批判、新しい展開など異つてくる筈で、前の時代との劃期とともに、この時代の分期にも十分の考慮が必要であると考えられる。

第二は共同研究の目標・構成に関してである。この共同研究は、そのなかに三つのテーマ群に示されるような異つた方向を有する研究を包含している。しかもそれぞれは独立の共同研究になりうるほどの目標・課題・方法・規模を有しており、これ等を一貫したものにするのはきわめて困難なことであるといわざるを得ない。かえって三テーマ群が独自にまとまりをもった共同研究活動を行なった方がさらに新しく深い問題の展開が可能となり、そこからさらに突込んだ明清時代科学技術史の問題の核心へ迫

ることができたかも知れないと思うのである。

第三は研究対象の評価に関する問題である。

本書所収論文では、明清時代科学技術、あるいは中国科学技術に対する評価が、必ずしも統一されていないため、これが共同研究の成果という性格を幾分弱めていることは否定できない。他の場合もそうだが、ことに『本草綱目』の研究は、この評価自体が研究方法乃至は研究そのものに係っているだけに、この問題はかなり重大であるといえよう。つまり、近代科学・近代西欧の精神・価値観・方法などを基礎とする一という基準・尺度による中国科学技術に対する評価と、中国科学技術それ自体の発展のなかにあって有する位置付けと評価とが各様であるということである。成程、このことは各個の研究にニュアンスの差異を与え、それぞれの研究において、個性を發揮せしめていることは事実である。しかし、こうした点に対して共同研究がどういった答えを出したかということは、はっきりした形で表明されてはいない。われわれ素人の読者が知りたい重要なポイントは実はこうした個別の研究の集積の結果から得られる一種の総決算なのである。ともあれ、明清時代科学技術史研究に正面から取組んだこの労作は、わが国はもとより国際的にも高い評価を受けるものであることは疑いなかろう。(B5版、五八二頁、人文科学研究所)

(船越昭生)



「世界資本主義」とはまことにいかめしく、威圧的な表現である。この研究班で三年前に発表された「世界資本主義の形成」の序の中で、「世界資本主義の形成」という耳馴れない、誇張とも受取られかねない表現」と書かれているところからすると、私の受けた印象は必ずしも私の不勉強のせいだけからではないようである。このいかめしい「世界資本主義」に加うるに、さらに「歴史構造」という、文字を見ただけで頭のいたくなりそうな表現が続く。私が書評を引受けるのに二の足をふんだのも、無理はないと御理解いただけるだろう。

だがこのいかめしい「世界資本主義」とは、要するに「世界的体制としての資本主義」「国際的・世界的契機によって形成され、世界を再編しようとする衝動をもつ資本主義」という程の意味であるらしく、それならば私にも納得がいく。しかしことさら「世界資本主義」という表現をとっているのは、平易に表現すれば難なく理解できることをわざわざいかめしく表現しているというのではないようである。というのは、これまでわが国では資本主義、とくに資本主義形成史の研究は、一国の資本主義の形成・発展、およびその国内的な諸条件やその特殊性を究明するという視点から研究されることが多かったのに対して、グローバルな視点から資本主義の発展（時に資本主義発展の「歴史法則」という

言葉も使われている）を明らかにしようという意図がこめられており、そのような視点の転換の要請の中にこそ、ことさら「世界資本主義」なる概念を使用した理由があるようである。

私は近代経済史の研究には明るくないが、少くとも数年ないし十一年程前までは一国の資本主義化の研究ないし比較経済史研究が優勢であり、先進資本主義国、後進資本主義国という類型的な把え方が支配的であったことは確かである。それに対して単に先

## 世界資本主義の歴史構造

## 書評

編 二 郎  
健 二  
野 沼  
河 飯

進、後進というのはなく、同時代性において世界史的関連のもとに把えかえさねばならないという反省が起ってきたことも私の記憶のうちにある。それに加えて時代の動きが反映して、このような「世界資本主義」的視点が現われることになったのであろうと考えられ、それは戦後の近代経済史研究が辿りついた極点であるように思う。そして近代経済史に暗い私としても、「世界資本主義」の三重構造論、国民経済の把え方その他教えられると

ころが多かった。しかし敢えていうならば、この書物に編まれている論文は比較的総論風であり、理論的整理という性格が強いように見受けられる。それは三年前の書物で、各論が展開され、その上に立つて行なわれた理論化の試みであるからかも知れないが、少なくともこの書物だけからみるかぎりでは、将来の個別研究にまつところ多く、それへの視点を提供する中間的な理論的整理という印象が強い。もし私の印象にして間違いでなければ、この研究班がここで解散されたことは、個別研究を将来に残していると思えるだけに惜しまれるが、研究の深化の課題を将来に残すことは、どの共同研究にも不可避のことであろう。

なお、論文のほかに、それらの論文についての班員による討論が付されているのは、非常に面白い、だけではなしに有益な試みであり、共同研究の成果発表の一つの行き方を示していると思う。（A5版、三五五頁、岩波書店）

（中村實二郎）

## 大正・昭和初期の

## 時代思想と世論

井 上 清

井上清を中心とする班は、ずっと大正期を中心に政治、経済、社会の分析をおこなってきた。現在、なかなか手に入れにくくなってしまった『米騒動の研究』全五巻をはじめ、昨年の『大正期の政治と社会』（岩波書店）にいたるまで、もっぱら、実証的、基礎的研究に力点を置いてきたのである。

今は、なかなかしやれた題がついてはいるが、実際は、今までの成果をふまえて、より広く検討をすすめているといったことになろうか。

大正期は、いうまでもなく、いわゆる大正デモクラシーが多くの影響を諸方面にあたえ、藩閥打破の運動が展開されたときだった。だが藩閥は、いかに山県有朋が死んでも、陣容をたてなおし、昭和期の権力を形を変えて握りなおし、満州事変へと突きすすんだのである。この

時期の「時代思想と世論」をとらえるために、この班は、当時、経済雑誌としてだけでなく、政治・社会問題に特異な論調をはって注目を集めていた『東洋経済新報』の誌面の分析を中心におき、同時に『大阪朝日新聞』の論調と比較検討することで、当時の権力構造から一般人の意識までをさぐるうとするものである。同じ『朝日新聞』といっても、当時はまだ「東京」と「大阪」は別々に編集され、東京版はややコンサバティブなのにたいして、『大阪朝日』は、デモクラシーのとりでの観を呈していたのに注意したい。

毎週水曜日の研究会では、異常なほど厚い報告メモが参加者に配布され、事務局が悲鳴をあげざるをえないのも、一見小さい記事から、それぞれの時期の意識を探ろうとしている試みとしてである。

雑誌、新聞一つ一つの分析はどこまで有効か、との疑問はあるが、もちろん——『東洋経済』と『大阪朝日』を中心に——とは、いいかえれば手がかりの表示にすぎず、報告は権力論から労働運動論へと多岐にわたっていることは申しそえたい。諸雑誌・紙はもろんだ。

わたしたちの班の成功率は、この手がかりを、どう押しひろげ、大正期の各側面の分析に入りこんでゆくにかかっているだろう。

## 家族問題の研究

太田 武男

この研究は、夫婦・親子・相続などをめぐる諸問題に関する理論的・実証的研究を、その主たる目的ないし内容とする。従来、この方面の研究は、法律学者もしくは社会学者によって個別的に行なわれていたが、今回のわれわれの研究は、法律学的な観点からの考察を中心としながらも、社会学・心理学・社会心理学・倫理学・人類学などで他の専門分野の観点からの考察をも加え、総合的に進められた点において特徴的である。

昭和四十一年四月より始め、最初の三年間は、テーマを「夫婦問題」なかでも「戦後の離婚問題」にしほり、その社会的背景や実態、法律上の諸問題について検討をすすめてきた。相前後して刊行した太田・加藤編『現代女性の結婚観・離婚観』（京大人文科学研究所調査報告二二号、一九六八年）、および太田編『現代の離婚問題』

（有斐閣刊、一九七〇年）は、その成果である。

そして、昭和四十四年四月からは、親子問題を中心に研究を進め、原則として毎週一回定例研究会を開き、すでに、親子関係の本質や養子制度などについての検討をすすめてきた。今後は、親子観・親子の愛情・血縁などの問題をはじめ、親子関係の発生（嫡出の推定・否認、認知の問題を含む）・親子関係の効果（親権、扶養、相続の問題を含む）をめぐる諸問題、さらには、施設児や人工授精子などの問題にも及ぶ予定であり、その研究成果は、『現代の親子問題』と題する一書にまとめて刊行したいと考えている。

なお、その間、右の理論的・実証的研究と平行して、家族法ないし家族問題一般に関する資料（判例・文献）の蒐集・整理をも試みてきた。相前後して刊行してきた、太田編『家族法判例集成（本冊ならびに追録）』、同『家族法文献集成』、太田・加藤・井上編『家族問題文献集成』（いずれも、京大人文研刊、非売品）も、その成果である。

さらにまた、われわれは、この夏、産業構造の変革にともなう家族関係の変遷の実態を把握すべく、京都府下の山村地区での調査を実施した。いずれ、その結果は、太田・井上編『山村における家族の生活』と題する一書（人文研調査報告）にまとめて刊行の予定である。

## 社会科学における 電子計算機の利用

三宅 一郎

一昨年スタンフォード大学にいたとき、政治学専攻の大学院学生と話をする機会が多かったが、しばらくするうちに、電子計算機を多かれ少なかれ研究に利用していない学生が一人もいないということがわかった。毛沢東の肖像をピンアップしているA君はヴェトナム戦争のシミュレーション（模擬実験）をやっており、米国のヴェトナム政策を批判できる結論が出そうだという。B君は日本政治専攻で、統計数理研究所の「日本人の国民性」研究のデータの再分析に取組んでいるという具合である。一人一人の研究については成程と思ったのだが、この大学全体として見ると、偏りすぎの感がしてならなかった。政治学の伝統的な課題のすべてが電子計算機によって片付けられるとは思えないと、彼らと議論したもの

である。

私がスタンフォードでこういったのは、もちろんアメリカ人学生が相手であったからで、日本では、電子計算機利用のすすめをまだまだ声高く唱えねばならない段階にあるのではないかと考えている。

われわれは研究のためには多種多様のデータを利用するわけだが、データによって分析法を変えねばならぬことはいうまでもない。人文科学の研究でも統計的方法が可能であり、かつ好ましいというデータがあるだろうし、社会科学でも、文芸記述風の分析しかできないデータを取扱わねばならない場合が少なくない。データが豊富とはいえない領域の研究ではデータのより好みをするわけにはいかないから、研究者の側でも、唯一つの分析法しか出来ないというのでは駄目で、多くの分析法に通じておく必要がある。

多くの分析法の中で、これまでの訓練や経験のゆえに、われわれにとって最も馴染みの薄いものが電子計算機によるデータ処理であろう。また、サービスを提供する計算機センターの側でも、われわれの研究内容とか方法についての知識がほとんどないか、間違った知識をもっているために、どうすれば人文・社会系の研究者に有効なサービスを提供できるかわからないという状態のようである。われわれの研究班は、このような電子計算機

と人文・社会系研究者の間のギャップを少しでも埋めようと試みている。

## 社会運動の研究

渡 部 徹

この研究会のテーマは、主として第一次世界大戦から大恐慌のあいだの時期を中心に、労働組合運動、社会主義運動、広く民主主義的運動の実態を明らかにしようとして出発した。

一見、「大正・昭和初期の時代思潮と世論」班と時期的に似ているように見えるが、討論は相当意識的に方法をたがえている。

つまり、この時期の社会運動は、とりわけ欧米からの影響が多かった。労働組合運動でも、欧米から流入したギルド・ソシアリズムは、明治以来根をおろしていたアナルコ・サンジカリズムとからみあい、やがてボルシェヴィキの組合論に座をゆずってゆくのだが、この変転は、欧米・ソヴィエトの現実分析なしには解明できない。

い。

さらにコミンテルンの影響を各国において十分分析し、日本の場合と比較することなしには、日本の社会主義運動は検討できない。コミンテルンの実体分析も同様に必要なのである。

加えて、日本では、社会運動と総称される組合、社会主義についての原理論が今まであまりにイージーに語られ、善玉・悪玉史観で運動史をわりきる傾向が強すぎたため、諸運動の原理論の再検討もふくんでゆかなければならない。

班員のメンバーが比較的少ない現状で、これらすべてが共有財産として残せるか。われわれは、残せるし、発展できると思う。

過去にこうした試みがきわめて少なかったことが、各人の報告の「題」そのものの、一見、直接の関連を読みとりにくい印象をあたえているかも知れないが、共通した問題意識による討論によって、問題はあきらかになっていると思う。

この研究は班として二期目をむかえた。資料集蒐もかなり進んだ。この期間中になんらかの形で研究報告を出版したいと考えている。茫々たるテーマをにかけているこの班も、インテンシブな内容を持たんとし、持ちつつあることを付言したい。

### 辛亥革命研究

小野川 秀美

中国近代史は、いうまでもなく、世界史の一環としてとらえられるべきものである。過去数千年にわたって高度の文明を維持してきたり、また現在、人民の権力を確立して共産主義へと前進しつつある中国は、その近代百年におよぶ時期を通じて、列強の世界支配体制にくみこまれた半植民地として存在した。辛亥革命は、この中国近代史における不断の解放闘争のひとつの高峰なのである。

したがって、清朝支配を打倒してアジアで最初の共和制を樹立した辛亥革命は、たんに連綿たる王朝支配にたいする断絶・飛躍であったにとどまらず、二十世紀初頭における帝国主義世界体制にたいする抵抗・造反でもあった。そしてそれは、義和団鎮圧により中国侵略陣営の正式の一員となった日本帝国主義が最初に直面した革命

であり、たとえ十分な成熟をみなかったとはいえ、東アジアの規模における革命と反革命の萌芽的戦列配置でもあったといえる。

われわれは、この辛亥革命を研究するにあたり、主要なる関心を義和団から五四におよぶ約二十年間に集中し、この革命によって中国近代史上におけるいかなる新展開がみられたのかを、政治・社会・思想等の各側面から解明していきたいと考えている。そのさい前提とさるべきは、帝国主義の中国支配の実体についての共通の認識であるが、現在のところ、これをも研究テーマのひとつとしてあつかわざるをえない、というのが実情である。この問題については、当然ながら、個別的には日本帝国主義の問題にもっとも大きな関心がはらわれることになる。そして中国内地的に問題をたてるとすれば、清朝支配の体制（とくに軍隊）、思想的変動、とりわけ伝統的思想と新思想のからみあいのなかで熟していく革命への世論準備、革命派に代表される革命主体の形成と立憲派に代表される改良主義潮流の歴史的役割、等々のことをあげうるであろう。

問題は多岐にわたらざるをえないが、共同研究班としての有機的関連を保ちうるよう、四月以降の研究会では参加者各人が自らの問題を提示しあうことにし、それをふまえて全般を配慮し、秋に全員のテーマ分担を決定す

るつもりである。なお、研究会は毎週土曜午前（来年度からは金曜の午後にしたい）に二時間半ぐらい行なっており、一九七二年度までの三年間で研究報告をまとめあげるつもりである。

## 朱子研究

田 中 謙 二

たしか一昨年の二月だった。西洋部の上山さんから『朱子語類』を読んだらどうかと勧められた。わたくしが新たな共同研究のテーマを摸索していた時である。わたくし自身は、実はそれまでの研究の中心を占めていた俗文学から伝統文学へ転身するつもりでいた。だが、上山さんが勧めてくれる対象の共同研究としての意義をあらためて熟考し、それが正に好箇の対象であることに想到した。たしかに、わたくし自身は支柱の一本でしかありえないが、従来の経験と蓄積がかなり活かせる。もしも本所のスタッフの協力がえられるなら、おそらく他処

では絶対に期しえぬ成果が挙げられるだろう。

朱子乃至朱子学が東洋の近七百年間に果たした役割はいまさら説くまでもない。ただ、その真相が究明されているかといえ、のちに島田さんの証言もえたが、わたくしには直感として疑念があった。それは主著以外に『朱子語類』一四〇巻の自在な駆使を俟って始めて可能だからである。ところが、この重要な資料は、口語を基調とする特殊な文体——一種のノート体で綴られて、異常な難解さを与える。それがいかなる意味でも文学作品でないことや、記録者が多数にわたることも、難解さを加増している。それに、スケールの宏大な朱子の思想体系は、哲学・宗教・文学・語学・史学はもちろん、自然科学の分野にも及び、相互の関連をぬきにした各分野のみの研究では、どうしても完全を期しがたい。『朱子語類』を中心とした朱子乃至朱子学の研究が、本所においてこそ可能な所以である。しかも、本所には朱子研究の専家でもある島田・山田両氏を擁している。わたくしは確信をもって両氏にはかり、その快諾をうるとともに、所内の協力をも求めた。かくて、前年度に予定した諸種の準備がなお十分でないまま、本年五月十八日に本研究が発足したのである。

この報告期間には、前後七回の研究会をもった。ただ、特異な文体をもつ『朱子語類』に全員が習熟する必

要もあり、この期間には、田中による『朱子語類の成立過程』の報告のほかは、巻一「理氣」上の会説討論に終始した（担当者は島田・寛・山田三氏）。討論は思想・語学の両面にわたって活発に交わされ、未解決の問題が旁証資料の探索によって次回に解決することもしばしばであった。会説討論の結果は、わたくしが山田氏の協力を得て二三日中に整理し、訳註と割記の形にまとめる。この部分は、報告の一部として逐次刊行してゆく。なお、九月以降には、毎月一回を班員による報告に当てる予定である。

### 漢代文物の研究

林 巳奈夫

今年度より表記の共同研究を始めた。「漢代文物」という場合の「文物」の語によって理解する所は、狭義の考古学的遺物ばかりでなく、金石、古文書など、伝統的な文献資料以外の文字資料をも含めた広義の遺物である。

る。漢時代は中国史上遺物、図像資料、金石、文書等の広範にわたる「文物」を豊富に手にしうる最初の時代である。また文化の各方面にわたる、漢は後世において一つの重要な基準とみなされている。それにもかかわらず文物の方面よりする研究は十分でない。共同研究のテーマとしてとり上げた所以である。手はじめに沂南の画像石を研究対象にとり上げ検討中である。

### 天下郡国利病書の研究

日比野 丈夫

この書物の名は中国学の専門家でなくとも、ある程度の人には知られているし、まして一七世紀末の大学者顧炎武の著書であるといえ、誰しも相当の敬意を払うべきはずのものである。しかし、これをはしからはしまで通読したという人は、おそらくまだないであろうし、その資料的吟味といったことも本格的には行なわれていないと思う。



いったい、この書物は著者が明の遺臣としての立場から、明王朝治下の中国の長所、短所を反省する目的で、長年にわたって集めた資料集ともいふべきものと考えられる。しかも、それは未整理、未完成のまま残されているのであって、一応明代の省別に排列されているとはいえ、全体としての体裁はととのっていない。その資料は明代の地方志から抜萃されたものが多くを占めているが、実にさまざまな書物から集められていて、しだいに明らかになってきたのは顧炎武その人の文章が全くといっていいほど見当らないことである。従って、何を利（長所）として何を病（短所）としたかという著者自身の考えは、その大きな学問体系を通して汲みとらねばならないことになってくる。

この書がいままで徹底的な研究がなされず、資料としてもぎわめて断片的にしか利用されなかったのは、やはりこのような事情によるのであろう。従って、この研究は資料の依拠した原典をできるだけ遡ってつきとめるとともに、明代史全般にわたる広い視野から、さらに大きく中国史全体の中における明代の位置づけといったものまでをも含めて検討すべきだと思う。もちろん、これは非常に困難をとまなうのであるが、幸いにも前者は近年わが研究所で鋭意蒐集してきた明代文献によって、ほぼ見当がつくのである。その内容にいたっては、顧炎武の

もっとも意を用いているところ軍事、賦税、水利の三項にあるというが、要するに社会経済問題に重点がおかれているといつてよい。すると、この書は明代文献を顧炎武というふるいにかけて、再編集された明末の中国社会経済地志ともいふことができるのであって、当時の社会経済各方面にわたる諸様相を、地理的な差違からとらえようとした一面をもっているのである。

つまり、唐の中ごろからしだいに安定しきたり、明代にいたってほとんど確定的となった中国の地域区分が、中国の社会経済の発展とどのように影響しあっているかということが、一つの重要な課題である。それにもかかわらず、明代の国防線は北辺一帯の非常な長距離にわたる、兵員物資の移動は全国的な規模において行なわれたため、交通や流通は地域区分を遙かに超越していたのであって、その実態を明らかにすることが第二の課題である。第三には、このような社会経済的背景のもとに、中国人の統一的な民族意識ともいふべきものが形成された経過、明清交替期をへてそれがいかなる動揺変化をおこしたかということを課題として取扱ってみたい。

## 白氏文集の校定

平岡 武夫

「白氏文集」の本文の校定を目的とする。まず資料の蒐集に努力して、那波本・馬元調本・汪立名本など、通行の本のほかに、金沢文庫本・蓬左文庫本・林家校本・尊経閣本・要文抄本・管見抄本・紹興本・郭武定本その他、貴重な資料をゆたかに集め、それらを総合して校勘表を作り終え、さらに語彙索引をも完成した。それらの用意の上に、週一回、共同研究をおこない、一篇一篇を読み定めている。

一九七〇年からは、中書制誥の作品をとり上げた。この種類の文章はこれまで十分に徹底しては読みこまれていない。官制・慣習・官僚の心理・用語などにも関心をもちながら読み定めている。

## 隋唐の思想と社会

福永 光司

この研究班は、五世紀(A・四二〇年、劉宋王朝の成立頃)から、八世紀半ば(A・七五五年、安祿山の乱の勃発頃)に至る間の、中国思想とインド思想との交渉を、中国思想を主体とする立場から考察することを目的として、今年四月から五ヶ年間を目途として新しく発足した。

班員は、所内が平岡武夫、田中謙二、川勝義雄、牧田諦亮、山田慶児、荒牧典俊、礪波護、愛宕元の八氏と所外が長尾雅人、吉川忠夫、興膳宏の三氏であるが、研究班の発足にあたって班員の数度にわたる討議の結果、一おう設定された具体的な研究課題は、次の如くである。

(一) 中国仏教の教理展開に即して見られる仏教の中国的な独自性の考察。

(1) 仏典の漢訳に見られる中国的な独自性。

(2) 漢訳仏典の注解・解釈（義疏・疏記の学）に見られる中国的な独自性。

(3) 仏教教理の体系化（教相判釈）に見られる中国的な独自性。

(4) 中国仏教諸宗派（とくに浄土、天台、華嚴、禪）の成立に見られる中国的な独自性。

(二) 中国仏教の中国知識人ないしは一般社会に与えた影響についての考察。

(1) 思想（主として儒教・老莊・道教に与えた影響）

(2) 文学（神怪小説、文学理論、個人の著作集などを中心として）

(三) 中国仏教の成立と展開における歴史的・社会的諸問題。

——班員である川勝・吉川・礪波諸氏の『中国中世史研究』の成果をふまえて、問題と考察をさらに展開させる。

要するに、五世紀から八世紀半ばに至る中国において、仏教（仏典）が如何にして漢字文化の中に組みこまれ、中国民族の哲学的思考の中に取り入れられたか、またそれを可能にした中国の歴史的・社会的条件ないしは基盤は、いかなるものであったかを考察することが、この研究班の主要な関心であるが、第一年度においては、六朝仏教学の一つの集大成ともいべき吉藏の『三論玄

義』の会説を中心として、その間に班員それぞれの専門的立場からする研究発表をまじえ、毎週一回（水曜日の午後）の会合による基礎的な研究を進めている。なお現在までに行なわれた班員の研究発表は、

荒牧典俊「六朝仏教における大乘と小乗」（六月十

七日）

礪波 護「六朝隋唐史の展望」（七月一日）である。

## 敦煌写本の研究

藤 枝 晃

今までの共同研究「中国古文書の体系化」を今年四月に改組して、標記の題目とした。

敦煌写本中の北朝期のもの、とくに古逸書を向う四ヶ年間に総点検することに目標をおく。北朝期の古逸書とは、ほとんどが仏典注釈書の類で、隋唐以後に南朝系の学問が優越したために中国では滅びたものである。そう

いう資料は、豊富とは言えないまでも、乏しすぎることもなく、慎重に編年化の操作を加えれば、北朝の学問の系譜復原へのある程度の見通しをつけることも望み得る。

一月―六月の間に会読した写本は次の通りである。

法華疏 (P. 2273, S. 2733, S. 2439, S. 4102)

担当、源、山田、土山

S. 2104 十地論義疏 担当、古泉

S. 6492 大義章卷五 担当、荒牧

また、会読のほかに、次の様な報告、調査、見学などを行なった。

報告

今西氏蔵、唐宮廷写本「法華経」(一、一二)

(書評) 宇井伯寿『西域仏典の研究』(二、九)

(書評) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』

(解題) 藤枝晃 The Tunhuang Manuscripts (II)

(四、二七)

台北国立中央図書館コレクション(五、四)

大淵氏将来ベリオ本フィルム目録(六、一)

資料調査

法隆寺、三経義疏(三月四日、四月六、七、八日、五月十九日)

月十九日)

龍谷大学西域資料(三月十七日)

奈良国立博物館、円珍資料(四月二日)  
東京国立博物館、〃(五月十八日)

## 類目委員会

市原亨吉

本研究所では、毎年(最初の頃は隔年、最近では毎年)、東洋史研究文献類目(昭和三十六年度より、東洋学研究文献類目と、昭和三十八年度より、東洋学文献類目と改題)を刊行して、東洋学研究者への便宜をはかって来た。昭和三十八年度分よりは、東洋学文献センターが中心となって編纂に当たっていたが、本年よりは、類目編纂のための委員会が新たに発足して、その編纂を担当することとなった。現在の委員は九名で、毎週一回、定期的に会合して、編纂のための共同作業を実施している。

東洋学文献類目は、日本・中国・朝鮮・欧米の学術雑誌に掲載された東洋学に関する論文および単行本その他の関係文献を年度別に分類収録したものであり、巻

末には、利用者の便宜のため、五十音、筆画、ローマ字、ロシア字の四種の著者索引が附されている。当初は、本研究所の蔵書に掲載されていた文献に限られていたが、昭和二十一〜二十五年度分からは、それ以外の学術雑誌に掲載されていたものをも、広く収録している。

現在は、一九六九年（昭和四十四年、民国五十八年）度分について、資料の収集をほぼ終り、一九七〇年（昭和四十五年、民国五十九年）度分の資料の収集を継続実施中である。また、本年中に原稿作成、昭和四十六年三月末に印刷出版を期して、一九六九年度分の資料の補充・整理に努めている。

一九六九・一九七〇両年度を通じて、特に眼に止った現象としては、中国大陆においては、依然として、われわれに関係のある学術雑誌・単行本の出版が停止されているが、日本・台湾・香港・新嘉坡・朝鮮などの諸地域においては、東洋学に関する学術雑誌の創刊・復刊が相次いでおり、また単行本では、台湾において、中国古典の復刻、百部叢書集成、中国近代史料叢刊などの大部な書物の出版が盛んである。

われわれは、これらの諸雑誌に掲載された重要論文・単行本の収録に、万遺漏なきよう努力しているが、なお努力の及ばない点がどうしても残るので、著者・発行者の類目編纂へのご協力を切にお願いする。

## 漢籍委員会

川 勝 義 雄

本研究所において購入される漢籍の整理は、もともと圖書掛が行なうべきものであるが、漢籍のもつ特殊な性格によって、中国学の専門家、つまり教官の参加協力が必要とされ、従来はいわゆる「文献班」に所属する限られた数の教官が、その責任を負うことになっていた。さらに、東洋学文献センターが本所に附属して設置されて以来、撮影複写によってそこに蒐集される漢籍は、文献センターの教官と職員が独自に整理する体制であった。しかし、購入と複写の相違があるとしても、漢籍整理という同種の業務を別々の機構で行なうことは、かえって不統一と不合理を生ずるので、従来本所で行なわれてきた漢籍整理法に従って、これを統一的行なうための機関が必要とされた。本委員会設置の理由は、一つにはそこにある。

さらに、本所の漢籍整理法が、いまや日本だけではな

く、世界における漢籍整理の一つの基準になりつつあるとき、本所の整理法を今後も長く維持し、また普及させてゆくことは、本所全体の責任においてなさるべき事業でなければならぬ。したがって、この事業を遂行するための機関は、従来のように限られた数の特定の教官および職員によつて閉鎖的に行なわれるものではなくて、できるだけ多くの教官や職員がかかるこれに委員として参加しうるような委員会形式が適當であり、そこにおける集団処理を通じて、本所の漢籍整理法を実習し知悉してゆくことが望まれる。本委員会が漢籍整理を実習する場としての機能をもつことになったゆえんであり、したがって本所以外の人もその実習を希望する場合には、研修員として本委員会に参加できることになっている。実際に、昨年から本年にかけてフランスからの留学生一名が研修員として参加し、本年度も他大学の講師一名を受け入れたほか、本学図書館職員数名が本年三月まで参加していたのである。

およそ以上のような趣旨にもとづいて、本委員会は形式的には暫定措置として昨年七月に発足し、実質的には昨年九月に、まず吉川幸次郎博士に本所収蔵漢籍とその整理法に関する講演を二回にわたつてお願いしたときに始まり、それ以後毎週一回、実際に漢籍を手にとつて整理実習と整理業務の処理とを行なつて、現在に至つてい

る。本年度の委員は現在十三名、研修員は一名である。

## 異端運動の研究

会 田 雄 次

人間の日常生活の一切を、それこそ箸の上げおろしから、精神の深奥までを、排他的な強力な宗教ないしイデオロギーが体制そのものとして支配する。日本人はそのような民族的体験を持つていない。独裁国をマゾヒズムを加えて理想化し、それを憧憬したりする理由であらう。そのような世界で、体制精神以外に自分自身のよりどころを見出したり、それを求めようとした人々はどうするのか。

ヨーロッパ中世末期からうずまきはじめた異端運動は、その意味において人類の持った大きな経験だといつてよい。私たちはこのヨーロッパの異端運動を、極限状況を生み出したということで純粹培養的現象と考え、それ以外のビザンツや東方の異端的運動と比較考察しつ

つ、異端運動そのものの本質を追求したいと考えている。現在は、方法的反省をまじえつつ、各地域、各時代における異端運動の経過を報告し合い、その知識を班員の共同財産としようとしている段階にすぎないが、来年度以降は本格的な個別研究に移行できる見込である。

## 文明の比較社会人類学的 研究・アフリカ社会の研 究・理論人類学研究

梅 棹 忠 夫

人類の姿は、その個々の文化において把握されねばならないが、同時に文化を超え、諸文化をつらぬく文明論の立場からも了解しなければならぬ。ただしこの立場を具体的に展開するためには、われわれはつねに原資料にもとづく事実即した検討を重ねてゆく必要がある。

本研究班は毎週の研究会の隔週をこれにわりあて、社会

人類学的資料を各自が提出し合いながら研究をすすめていく。

社会人類学的資料のうち、ことにアフリカ社会については、昭和三十六年以来おこなわれてきた現地調査にもとずき、その一部はすでに KYOTO UNIVERSITY AFRICAN STUDIES Vol. 1~5 として英文報告が公開され、また邦文では『アフリカ社会の研究』（今西・梅棹編）があるが、毎月一回の研究会において資料のまとめと検討を継続している。この研究は当初の東アフリカから、現在は北および西アフリカにも資料の蓄積がおよんでいるので、文明論の対象としても重要になりつつある。

いっぽう、このように文明論的な考察をすすめる上には、巨視的にも微視的にも、高度な理論の構築を必要とする。それは哲学的な概念や命題とは別に、数学的手法による明晰な記述方法を要求する。現在では人類学において、この要求を実現した例は、親族名称体系の記述に関する群論の適用などのほかには、見るべきものは少いが、本研究班における和崎のアフリカ社会の人口・種族数による系列性の研究は、今後の発展が期待されるもののひとつである。理論人類学の研究は、毎月一回の割合で群論や、記号論理学的な研究を重ねるとともに、習性学その他の一般的な現象についての関心を保っている。

## 十九世紀フランス

### 社会思想の研究

河野 健 二

この研究は、従来のフランス十八世紀に関する共同研究（ルソー、百科全書、フランス革命など）を継承して、十九世紀中期の社会思想の検討を試みるものである。

当面の課題として研究班は、フランスの社会主義思想とくにブルードンの思想と実践をとり上げている。ブルードンはアナキズムの源流とされる一方、マルクスおよびマルクス主義の側からの徹底的な批判にさらされ、その「空想性」「小市民性」が指摘され、「誤まれる社会主義思想」の代表例のように取扱われてきた。

私たちはまず、ブルードンをめぐる激しい polemique が一体なぜ生じたのかを事実や問題状況の分析をおとし、解明しようとしている。そのためには一八四〇年代という歴史的時期のもった意味を明らかにすると同時に、

ブルードンの同時代人たるマルクス、ルイゲ、ヘス、バクイニン、ゲルツェン、ルイ・ナポレオン、コント、サンシモン、ルイ・ブラン、フーリエ、フローベール、ボードレール、クールベ、ジョルジュ・サンドなどとの交流の性質、役割を説明する必要がある、とくに一八四八年の「二月革命」が社会思想の上にもった意味を確定する必要がある。私たちは一方では、ブルードンの著作によりつつ、彼の立場、彼の問題設定を検討しながら、他方ではマルクス、ボナパルティズム、ボードレールなどを主軸とする他の思想との対比を行なうことで、以上に述べた問題への接近をはかっている。

マルクス主義それ自体の相対性や、歴史の現実としての「社会主義国家」の実態が明らかになりつつある現代において、マルクス主義とは異質の「フランス社会主義」は、単にフランス的特殊性を表現するものであるだけでなく、現代から未来にかけて何らか積極的な意義をもちうるのではないかという観測が、この共同研究に着手したとき、私たちの問題意識のなかにあった。この見込は、果して適中するかどうか、私たちは当然、地道な探求をつづける以外にはない。

社会主義思想のほか、歴史主義・ロマン主義・実証主義などをも扱う必要があるが、それらはなお今後に残されており、取扱い方も未定である。



## 現代における知識の意味

藤 岡 喜 愛

広い意味での知識は、あまり重要でもないたんなる情報から、われわれの行動に方針を与え、行動を促すにいたるものまで、その質と量は多様で莫大である。このうち、われわれの行動に力を及ぼす「知識」は、一定の表現とその繰り返しによって、なにほどこかの定式化あるいは形骸化を伴いつつ、なるべく多くの人々に伝達される必要がある。したがって、そこにはつねに、「知識」の意味するものを新鮮に保つべく、形骸化を打破しようとする別の欲求が生じている。この欲求は既存の体制を壊し、常同化した行動様式を否定し、いわば知識を解明して「実感」にかえようとする。

「知識」にかかわるこのような動きは、これまでつねに新しく繰り返えされてはきたが、現代はまたしても「知識」の意味を問いたおすべき時である、とするの

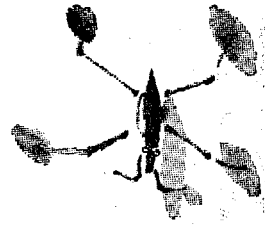
が、この研究班を構成する全員の趣旨であった。

しかしこのような趣旨は、もっとも一般的な欲求を含むものであるから、研究そのものはきわめて観念的なものに終りやすい。実際、研究会は当初「共同研究」について種々討議を重ねたけれども、見るべき成果を上げたとはいえない。それは具体性を欠いていた。

その反省にもとづいて、本年度に入ってから「柳田国男集」をとり上げ、そこに盛られている「知識」の性質について討論をつづけている。しかしこの「討論も、依然として柳田国男その人の研究でもなく、日本民俗学の内容の研究でもなく、しばしば方法論談議に陥入って観念的であり、碇を下ろすべき地点を見出さない。

本研究班はその意味では、みずからの欲求に形を与えるべき「なにものか」をいまだに見出してはいない。そもそも、このような、知識の意味を根底的に問いたおそうとするのは、精神的には一種の退行であって、方向において創造的ではあっても、状態としては未分化の混沌である。創造的退行とはいえ、将来に再構成を期待しうる点に価値があるのみで、状態それ自体に価値はなく、むしろそのまま欠陥状態へ移行する可能性をも含むものである。したがって本共同研究班の将来はまことに困難であると考えるをえない。

旅



扶余への旅

牧 田 諦 亮

一

二十数年来の私の中国仏教史研究の総括としての中国仏教通史近代篇著述のための、資料蒐集と仏教遺蹟の調査を目的として行なってきた、昭和三十一年秋の中華人民共和国の仏教視察、昭和三十八年春のインド・ネパール・セイロン・ビルマや東南アジア華僑地域の仏教の実態調査、昭和四十四年春の台湾仏教視察、ついで今春の香港・韓国の仏教視察旅行によって、漢字仏教文化圏での資料蒐集や現状視察をいちおう終えた。ことに朝鮮については、昭和十八年八月、東亜同文書院大学助手在勤中の夏休みを利用しての満州旅行にさい

して、釜山から新義州まで、いわゆる興亜特急で縦貫して、鉄道沿線の亭々たるポプラの並木と、あまりにも小さいわらぶきの民家だけの印象しかもっていないだけに、かねて朝鮮仏教の実情や遺蹟をたずねたい希望をもっていた。

さいわいに、四月一日からの香港での世界仏教大会出席や資料蒐集を終えて、四月二十一日にソウルにつき、五月十三日までの二十三日間の滞在期間中に、東国大学校での中国仏教史の講義のほか、かなり多くの遺蹟も歩くことができた。

これは東国大学文理科大学長李龍範氏・史学科主任教授安啓賢氏、同仏教大教授徐景洙氏、東国大学校博物館長黃寿永氏らの配慮によるもので、いずれも初見の人たちであったが、学問研究を通じてこのような便宜を与えられたことに感謝し

たい。

## 二

ソール南山山麓に、いろいろな色どりの大校舎がいくつもならんでいる。学校法人東国学院の経営する韓国唯一の仏教系大学である東国大学校である。秋葉隆・赤松智城・大谷勝真・江田俊雄・佐藤泰舜・高橋亨・中村栄孝の諸氏らが教鞭をとっていた京城中央仏教専門学校のもの恵化専門学校が発展して、一九四六年九月に、国文学科・英文学科・史学科を持つ東国大学となり、ついで一九四九年には、仏教宗団が全国の寺有林六三一五町歩を寄附して大学の財的強化につとめ、一九五三年に仏教大学・文科大学・法政大学・農林大学を持つ総合大学としての東国大学校に昇格したのである。今日では仏教大学・文理科大学・法政大学・経商大学・農林大学・産業大学・師範大学などから成り、学生数は五千。その規模の大きさにくらべて、その学生数は必ずしも多すぎはない。校地も景勝の地を占め、ことに図書館閲覧室などは、日本の大学では見られぬほどの広さであり、しかも利用者はほとんど満席にちかいほどであった。旧京城帝国大学の施設を継承した国立ソール大学や、儒教主義の成均館大学、その他多くの私大もあるが、それぞれに準戦時下の困難な状態を克服してよりよき大学への確立に邁進している姿はこのまじ

いものであった。東国大学校には附置研究所として、仏教化研究所・比較思想研究所・統計科学研究所・経営管理研究所・農林科学研究所・法政研究所・海外開発研究所があるがその内容の充実は今後にまたれるものが多い。附属機関としては図書館・科学館・博物館・農場・演習林や、仏教系大学校としての特殊性を示す東国訳経院・大学禅院がある。私どもの研究所にも寄贈されている高麗版大蔵經の縮刷影印版も、すでに第二十一巻が発行されており、經典研究の上に貢献している。ハングル(韓語訳)大蔵經の出版も四十巻以上も発刊されていて、經典の普及に役だっている。この両大蔵經の編訳出版には、国庫からも相当多額の補助金が支出されている。一は文化財の保護、一はハングル(韓文)の普及という、どちらも当面の急務として考慮されたものである。ことにハングルの普及徹底は、朴大統領の軍事政権下で、民族意識の昂揚という至上命令からきびしく実行にうつされていて、ソールの街頭から漢字の看板を見出すことは困難となっている。わずかに華商の中華料理店が漢字の看板をかけている程度である。ハングル大蔵經の編訳も、政府の政策に協力するものであるが、漢字とは比較にならないほどの現段階でのハングル語彙のすくなさは、適当な經典の訳語を見出すのに相当な困難があり、最終原稿の作製にあたっては、いつも編訳委員の間で激論がたたかわされるということであった。

五月八日、朝早くソールから最新式の長距離バスで大田にゆき、そこでタクシーをやって、公州・扶余・論山など、百済の遺蹟を訪れた。日本のポプラでは困るので、この頃はイタリヤからポプラの苗木を輸入しているというポプラの並木道を通る。このあたりはまだ舗装されていないのでほこりはきつい。日本にはじめて仏教を伝えたという百済の聖明王が、その即位十六年（五三九）に首都を公州から扶余に遷し、その後、百済の滅亡までの約百三十年の首都の地であったというこの土地の歴史は、たしかに日本人にとっても懐古心をそそられるものがある。遷都の後まもなく、百済は使を梁の武帝のもとに遣わして涅槃經などの経疏を求め、また仏寺莊嚴のための工匠・画師などの百済への派遣を請うたということから、日本に伝えられた初期の仏教のなかに、南朝梁の仏教の片鱗を見出し得るかも知れない。

今日の扶余の町は、錦江の流れに沿った一小都市に過ぎないが、その遺跡をめぐるとは、中国仏教史研究の一学徒にとっても、すこぶる有意義なことであった。あちこちの仏寺を訪れては、「この寺は加藤清正が焼いた」、「この寺は豊臣秀吉が焚いた」と聞かされるたびに、こちらはいっそう身をこませて小さくなったことは再三にとどまらなかった。扶

余以前の百済の首都公州でも、日本の占領中は倒されて土中に埋められていたという小西幸長を敗走させた明軍の顕功碑が、いまは公園のほとりに建てられていた。しかしその碑文には宗主国として明の万暦の年号が用いられていて、当時の強大国、明に従属を強いられた李王朝の窮境をものがたっていた。

韓国の国宝第九号に指定されている扶余定林寺址石塔は高さ八・三三メートル、花崗岩製で百済末期、七世紀初頭の作といわれる。これはかつては「大唐平百済国碑」として喧伝されたものであって、唐代の朝鮮経営の事実をものがたるものとして著明な歴史的遺物である。国辱的な名称は今日では拒否されて、その本名にもどって定林寺址五層石塔とよばれている。唐の大將蘇定方（五九二―六六七）が十万の大軍をひきいて、新羅の軍と連合して百済を討ち、三ヶ月たらずの間に百済王以下一万二千の俘虜を得て長安に帰った。この時、この五層石塔や、今は扶余博物館に保存されている国宝第一九四号の大石槽などに、唐軍による百済平定のことを刻せしめたものが今日に伝わっているのである。仏寺の五層石塔に戦勝のことを刻んだということに、勝ちほこる唐將蘇定方の心中を知ることができよう。その部將劉仁願の指揮する主力部隊が、六六三年に阿倍比羅夫の指揮する日本の水軍を白村江のほとりに大いに撃破して、ついに三百年におよぶ日本の朝鮮に対する野望を、豊臣秀吉の時代にまで永く断絶せ

しめることとなったことは日本朝鮮交渉史上にも顕著なできごとであった。

この蘇定方が死んでから七年目、咸亨四年（六七三）にその子の蘇慶節が亡父追善のために敬写した一切経六千巻の中の一冊、大樓炭経巻三が一一三〇〇年後の今日、たまたま京都知恩院に蔵されて、日本の国宝に指定されていることも、生流転の歴史のなかに貴重な影をのこしていることとして感慨ふかいものである。

#### 四

この扶余から南、全羅北道の益山郡王宮里は、その名の示すように百済の歴史にふかい関係があるように思われてきた。今西龍博士も、南北二丁東西半丁余ぐらいいと、その王宮の広さを推測しておられる。その王宮石塔の写真も一九三四年刊行の『新羅史研究』に載せられている。その石塔は博士の実測によれば、第一層の塔身は幅約八尺五寸、高約四尺五寸で八箇の石材を組んで構成しており、ついで上層に及ぶ巨大なものである。一九二四年には、この近くから帝釈寺の銘のある古瓦、仏像などが発掘されている。扶余の博物館でこの古瓦を見ることも、私の扶余行の目的の一つでもある。いな、その大部分であったかも知れない。

さきに記した東国大学校博物館長の黄寿永氏は、東京帝大

経済学部出身で、のちに考古学研究に転進した人で、韓国考古学界に大きな業績をたてている。一九六五年十二月五日に、おりから解体修理実施中のこの王宮里の五層石塔の第一層の屋蓋上面の、方形の舍利孔の西内面から、金板に陽刻した仏説金剛般若波羅蜜経が十九枚発見された。金板は横五寸七分、縦四寸九分、字径は二分乃至二分五という純金板であった。その第一面は、経題とも十七行、一行十七字詰の楷書体で刻まれている。黄館長は、一九六六年一月発行の『考古美術』七巻一号に、益山王宮里五層石塔内発見遺物として報告し、一九六七年四月三十日発行の『考古美術資料』第十五輯、続金石遺文に、第一面の写真を付けて紹介しておられる。まことに貴重な資料ではあるが、韓国の方に、これをうらづける文献がなく、困っておられた由である。

今年の三月、私は韓国旅行にさきだって、今度の旅行に招聘していただいた東国大学校へ私が本年一月に刊行した『六朝古逸観世音応驗記の研究』を若干部贈呈したが、その一冊を黄教授が入手したのは私が香港へ出発したあと、例の赤軍派のよど号乗とり事件で、金浦空港が世界の視聴をあつめていた時であった。この観世音応驗記は、京都粟田の青蓮院に蔵されている古写本で、もとは劉宋の傅亮・張演、南齊の陸杲らが編集した中国中世の観世音信仰応驗記であり、のちに若干の事蹟を加えたものである。中国には早く散佚し、日本でもこの約九百年以前書写の青蓮院本のみのようである。こ

の加筆した部分は、百済における観音信仰や仏教の奇蹟を録したもので、ことに最後の一条は次のとおりである。

百済武広王遷都枳慕蜜地、新宮精舎、以貞觀十三年歲次己亥冬十一月、天大雷雨、遂災帝釈精舎、仏堂七級浮図、乃至廊房、一皆燒尽、塔下礎石中有種々七宝、亦有仏舍利彩水精瓶、又以銅作紙、写金剛般若經、貯以木漆函、発礎石開視、悉皆燒尽、唯仏舍利瓶与波若經漆函如故、水精瓶内外微見、盖亦不動、而舍利悉無、不知所出、將瓶以帰大王、大王請法師、発即懺悔、開瓶視之、仏舍利六箇俱在処内瓶、自外視之、六箇悉見、於是、大王及諸宮人倍加敬信、発即供養、更造寺貯焉、

百済の武広王又は武王（六〇〇—六四〇在位）がある期時に枳慕蜜（又は慕蜜枳）の地に都を遷したことは知られていたことながら、何処に推定してよいか疑問であったという。その地に新しく営んだ寺が帝釈寺であることは、この記事から知られ、さきに発見された帝釈寺銘のある古瓦とも結びつくものである。さらに、王宮里の五層石塔の解体修理工事中に発見された金板の金剛般若経のことも、この文から裏付けされる。観世音応驗記の記事を読んで喜ばれた黄寿永館長の顔が想像できる。四月二十一日、金浦空港に迎えられた李龍範学長、安啓賢教授から、このことを聞かされた私は、私自身としては百済の仏教史に全く関心を持っていなかったことが恥じられ、また観世音応驗記出版についての労苦も、こ

の一事でふきとぶ思いを生じたのであった。またいかにも歴史研究の深く、博く、かつ困難であることを身をもって知らされたのである。

数年前に建築された新しい様式の博物館はまだ使用できないままに、数十年の長い間なお扶余博物館の役目をはたしつづけている古くさい建物の中の粗末なケースの中に陳列されているごく小さい帝釈寺の古瓦を見ながら、研究者の日々を続け得る喜びをしみじみとかみしめたことであつた。

東国大学校博物館長の黄寿永氏は、この八月、京都で開かれた三国遺事研究会（三品彰英博士主宰）に出席して、武広王の遷都・帝釈寺・益山王宮址五層石塔から発見された金板金剛般若経などについて、その後の研究成果を発表される予定であつた。暑いさなかを京都に到着され、その研究発表開始の直前に発病されて、そのまま京都第二日亦に一週間入院、少康を得てやむなく帰国された。私はその発表を大いに期待していただけにはなはだ残念なことであつた。今西龍博士の報告は、王宮里五層石塔の所在と、王宮址中央部に見られる踏石（おそらく帝釈寺から詛伝したものであらう）などであるが、黄教授の研究が百済末期史研究に大きな光明を投げかけるものと信ずる。



## アナーバーの留学生

内 井 惣 七

アナーバーにあるミシガン大学は、留学生が多いことでも有名である。毎年二月には大学のインターナショナル・センターの主催で「ワールド・フェア」という留学生のお祭りが開かれるほどである。

私は留学一年目、最初の八カ月間、コアプ (co-operative house の略) という一種の共同宿舎のようなところで昼・夕の食事をしていたが、ここでもいろいろな留学生とつき合うことになった。コアプというところには、通常、住み込みメンバーと食事だけに通うメンバーとを合わせて三十四〇経人が居り、営、労働 (料理、あと片付け等々) をすべて自分たちでやって経費を安くあげることができるのである。私の行ったところは、メンバーの約半数が留学生であった (ついでに

約半数を占める住み込みメンバーは全て女性)。多彩なメンバーの一端を紹介してみよう。

菜食主義をきびしく守り、いつもサリーに身を包んだインド女性二人、イギリスで教育されてきたスマートなインド人男子学生、北欧アストニア出身、スポーツ万能で柔道も二段の大柄な物理学者、香港出身で共産主義に共鳴している中国人 (彼はニクソンが大統領になったときには血相変えていた)、本国では五人まで妻を持てるというエジプト人エンジニア、祖父がワイマール共和国の重臣というドイツ系カナダ人 (彼とはよく哲学の議論をした)、その他台湾、韓国、日本、フランスといったところである。

気の毒だったのは、ナイジェリア出身のエンジニアであ

る。自称ナイジェリアの貴族という彼は、英語もうまく、服装等もうゆうとしていたが、その風ボウには米国黒人とは明瞭に異なる野性的な精カンさ、あるいはスゴミのようなものが感じられた。彼と雑談したおりには、「アフリカ出身の黒人と米国黒人との間がうまくゆかない」などともこぼしていた。また、ある時には前述のエジプト人（仲々の論客）とナイジェリアのピアフラ政策について大論戦をやったりもしていた。彼が気の毒というのは、六八年の冬に自動車事故で亡

## 講演

### ◆停年退官講演会

森鹿三、坂田吉雄教授の停年退官講演会は三月十七日午後二〜四時、分館会議室においておこなわれた。

日本近代化の出発と展開……………坂田 吉雄 教授

中国文化受容の一面……………森 鹿三 教授

——令集解と玉篇——

なお、講演の内容は、坂田教授「日本近代化の出発と展開」（人文学報、三〇号）、森教授「令集解所引玉篇考」（東

くなったからである。彼は友人四人と共に車でアナーボトの西へ向っていた。ところがカラマズーという町の近くの高速度道路で、凍りついた雪のため車がスリップし転倒した。他の四人は軽傷ですんだのだが、彼だけがシートベルトをしめておらず、車外に投げ出されて即死したのである。遺体を故国に送り返すためにアフリカの留学生仲間たちがその費用を集めている間、一カ月近く、彼はカラマズーの病院で冷蔵されていた。

方学報、四一冊）とほぼ同様であるので省略する。

### ◆サイモン氏講演会

滑洛中のロンドン大学名誉教授ウォルター・サイモン氏を迎えて、三月十六日午後二時、本館会議室において、左の通り講演会を開催した（東方学会と共催）。

Some Linguistic Problems in the Study of Tibetan

Walter Simon



# 書いたもの一覽

(五十音順)



## ・会田雄次

試論・日本人の意識構造

日本古戦場一〇〇選(監修)

憂国の論理(共著)

人文学報 二九号 二月

秋田書店 四月

日本教文社 五月

## ・飯沼二郎

世界資本主義の歴史構造(共編)

市民運動と階級闘争(上、下)

京都ベ平連機関誌・ベトナム通信 二四、二五号 一、二月

私たちの中なる天皇制 前掲誌 二六号 三月

ぬやま・ひろし対談「個性の確立と民族的自覚」

毛沢東思想研究 二・三月合併号

現代語訳及補注、中江兆民 「東洋自由新聞論説集」  
新聞論説集 一年有半 統一一年有半

(河野健二編 中江兆民) 中央公論社 一月

中江兆民の文体・序説 人文学報 二九号 二月

——『東洋自由新聞』を中心に——

## ・荒牧典俊

インド仏教思想史の基礎づけのために

——撰大乘論第三章第一節——

東方学報 四一冊 三月

ベ平連はいかに戦うか  
キリスト者と安保条約

毛沢東思想研究 五月号  
ベトナム通信 二九号 六月  
福音と世界 六月号

入管体制の抑圧構造

ぬやま・ひろし対談四「明治維新の本質をさぐる」(一)

風土と歴史

非情な入管令

・井口和起

第一次世界大戦と日本帝国主義

日本史研究 一一一 四月

——朝鮮の民族独立運動を中心として——

・石毛直造

マンガローラ村の住居 二 イラク族とスワヒリの場合

客間

人類学的食事論(関西コールドチェーン月例講演会)

第一回講演要旨集

火

佐々木高明「シコクビエと早乙女」へのコメント

ノブル・ヴィツク・レポート 二月号

季刊人類学 一卷一号

発展途上国と万国博

登山と野外科学

子ウシのくちがせとラクダのブラジャー

オセアニアの美術(世界の仮面と神像)

食事文化と女性

現代の眼 六月号

毛沢東思想研究 六月号

岩波新書 六月

大阪朝日新聞 六月一三日

ニューギニア探検記・解説(現代の冒険 一卷)

文芸春秋社 六月

書評・沈黙の世界史 一三巻

アドベンチャーの本

読売新聞 五月一六日

・市原亨吉

東洋学文献類目 一九六八年度(共編)

人文研 三月

蜀刻六十家集放

東方学報 四二冊 三月

・井上清

ぬやま・ひろし対談「明治維新の本質をさぐる」(一、二)

毛沢東思想研究 五、六月号

・井上忠司

はじめの社会心理学序説

人文学報 二九号 二月

——研究アプローチ・展望——

・今井清

全五代詩について

東方学報 四一冊 三月

・上山春平

第二次世界大戦(編)

河出書房 三月

唯識——認識と超越

角川書店 四月

婦人公論 六月号

・梅 棹 忠 夫

創造への地熱——西日本への可能性をさぐる（座談会）

朝日新聞 一月三日

日本は、無思想時代の先兵（対談）

文芸春秋 一月号

ヨーロッパと日本

企業と創造 一月号

季刊人類学のめざすもの（座談会） 季刊人類学 一卷一号 一月  
近衛ロンドンの五年間——京都大学人類学研究会の

歴史と現状—— 季刊人類学 一卷一号 一月

大転換期にある日本社会（対談）

教養月報 二五〇号 神奈川県総務部職員課 二月

現代における国語と国語教育

東京都高等学校教育研究会研究紀要八集 三月

Kyoto University African Studies, Vol. V（編集） 三月

日本語をいかに機械化するか（対談）“Graphication” 44.

四月号 富士ゼロックス株式会社

科学と非科学（対談）（湯川秀樹編・対談集「学問の世界」）

岩波書店 四月

日本海——この海をかけ橋に——（座談会）

新潟日報 四月一五日

小松左京「機械化人類学」の妄想へのコメント

季刊人類学 一卷二号 四月

柳本治美「シエルバ族の食生活を探る」へのコメント

季刊人類学 一卷二号 四月

日本人と日本的思考（座談会）

図書 五月号

日本万国博覧会の意義

学校経営 五月号

人間の未来を語る（対談）（石田英一郎対談集）

筑摩書房 五月

世界の仮面と神像（共編）

朝日新聞社 五月

未来社会と生きがい（一）週刊・朝日ゼミナール 七号

朝日新聞社 六月

〈情報化社会〉に思うこと

京都消防 二三巻六号 六月

現代の冒険（一）砂漠と密林を越えて（編集）文芸春秋社 六月

・梅 原 郁

王安石の新法（岩波講座 世界歴史 九巻）

二月

宋代の戸等制をめぐって 東方学報 四一冊 三月

宋代都市の税制 東洋史研究 二八巻六号

・小 野 和 子

顔元の学問論 東方学報 四一冊 三月

・小 野 川 秀 美

民報索引（上） 人文研 三月

光復会の成立 東方学報 四一冊 三月

・ 寛 文 生

中国現代文学史と三〇年代文芸の評価 東方学報 四一冊 三月  
漢字考 中国語 一二五号 六月

・ 樺 山 宏 一

「平和の擁護者」の思想 (世界と日本の歴史 一一卷)

学習研究社 五月

・ 川 勝 義 雄

中国中世史研究における立場と方法 (共著)

(中国中世史研究会編 中国中世史研究) 東海大学出版会 三月  
貴族制社会と孫呉政権下の江南 (前掲書)

世説新語の編纂をめぐる一  
——元嘉の治の一面——

東方学報 四一冊 三月

・ 河 野 健 二

Le marxisme au Japon avant la deuxième guerre mondiale.

Zinbun No. 10

東洋のルソー・中江兆民 (日本の名著 三六卷)

中央公論社 一月

世界資本主義の歴史構造 (共編)

岩波書店 一月

ルソーとフランス革命

人文学報 二九号 二月

論壇時評

朝日新聞 一月—三月

・ 衣 川 強

宋代の俸給について

——文臣官僚を中心として——

東方学報 四一冊 三月

書評・佐伯富著 中国史研究 第一

史林 五一卷五号

・ 阪 上 孝

ブルードンの社会科学論

思想 六月号

・ 島 田 虔 次

宋学の展開 (岩波講座 世界歴史 九卷)

二月

章炳麟 五無論 (翻訳) (山田慶児編 中国革命)

筑摩書房 二月

章学誠の位置

東方学報 四一冊 三月

陽明学と考証学 (大学セミナー東洋史)

法律文化社 五月

私の内藤湖南 (内藤湖南全集 一二卷 月報)

筑摩書房 六月

・ 多 田 道 太 郎

スポーツ気分の成立と崩壊

朝日ジャーナル

三月

日本の美学 (共編著)

風濤社 四月

私生活論 (今日の世界)

河出書房 四月

・田中謙二

元代散曲(套数)

(中国古典文学大系 二〇卷 宋代詞集)

史記の《笑い》

薬名詩の系譜(明清時代の科学技術史)

・礪波護

律令体制とその崩壊(中国中世史研究)

唐の律令体制と字文融の括戸

・永田英正

漢代の選挙と官僚階級

・中村賢二郎

書評・ベンジnk・ホイヤ共著 頼原義生訳

ツ農民戦争

・狭間直樹

辛亥革命時期の湖北における革命と反革命

・橋本敬造

唐蒙考成の成立(明清時代の科学技術史)

梅文鼎の曆算学

・林巳奈夫

殷中期に由来する鬼神

・林屋辰三郎

池坊二世専好とその歴史的背景(池坊専好立花)

花道の誕生(いけばな文化史 一卷)

・日比野文夫

史記貨殖列伝と漢代の地理区

・平岡武夫

東洋学の現況と文献センター活動

(国立文献センター編 文献センターの利用案内)

白居易と寒食・清明

五世の長者(青木正児全集 七卷 月報)

・福永光司

大人賦の思想的系譜

——辞賦の文学と若菜の哲学——

『Reviews』 R. H. Van Gulik; Hsi Kang and his Poetical Essay on the Lute.

Japan Quarterly Vol. XVII No. 2 五月

・藤 枝 晃

'The Tunhuang Manuscripts. A General

Description, Part II.'

Zinbun No. 10

楼蘭文書札記

東方学報 四一冊 三月

元代文化の世界性(日本と世界の歴史

八巻) 六月

・藤 岡 喜 愛

精神人類学の視野

季刊人類学 一卷一号

ロールシャハ・テストによるパーソナリティーの調

査(IV)——フランス サン・リエ村の場合——

京都大学人文科学研究所調査報告 二五号 二月

書評・片口他編

ロールシャハ法による事例研究

臨床心理学研究 九巻一号

・船 越 昭 生

坤輿万国全図と鎖国日本

東方学報 四一冊 三月

・牧 田 諦 亮

六朝古逸観世音応驗記の研究

平楽寺書店 一月

六朝人の観音信仰

東方学報 四一冊 三月

——王玄謨の帰信——

北魏の庶民經典について(北魏仏教の研究)

三月

台北中央図書館の敦煌経

印度学仏教学研究 一八巻二号 三月

・松 尾 尊 兌

民本主義の潮流

文英堂 三月

吉野作造 中国朝鮮論(編)

平凡社 四月

・三 宅 一 郎

政治意識と投票行動(内山秀夫・秋元律郎編 現代

社会と政治体系)

時潮社 五月

・山 下 正 男

科学と世界観

理想 四四五号 六月

北川香則著 インド古典論理学の研究を読んで

哲学研究 四四巻八冊(五一四号) 六月

・山 田 慶 児

科学技術と価値の世界

朝日ジャーナル 一二巻一号 一月

中国革命(編)

筑摩書房 三月

耶穌会士の科学研究(明清時代の科学技術史)

人文研 三月

・山 本 有 造

日本経済の発展と外資——日本資本輸入史序説——

人文学報 二九号 二月

・吉田光邦

万国博覧会

日本放送出版協会 一月

現代日本記録全集、科学と技術(編)

筑摩書房 二月

景德錦の陶磁生産と貿易(明清時代の科学技術史)

三月

明治前期の中国開発論

人文学報 三〇号 三月

バタインの中の菊(日本の文様・菊)

三月

万国博の技術史的考察

科学朝日 三月

主題としての人間の復権

新泉社 四月

祇園会と装飾性の意味(祇園祭工芸名品集(二))

四月

日本型工業社会の構想

中央公論 経営問題夏季

Expo Predicts Coming Age

Technical Japan 四月

日本刀の謎

日本美術工芸 五月

日本の造形 紙折

淡交社 六月

二つの価値—デザインのあり方

陶研会報 六月

・渡部 徹

解放運動史総括の視点と課題(部落解放研究第四回)

五月

全国集会討議資料)

部落解放同盟中央出版局

五月

人事



牧田諦亮講師(東方部)は助教に昇任(三月一日付)

坂田吉雄(日本部)・森鹿三(東方部) 両教授は停年退官(三月

三一日限)

福島吉彦助手(文献センター)は山口大学文理学部助教に outcomes

(三月三一日付)

河野教授は所長、東洋学文献センター長に併任(四月一日付)

西村源次事務長は文学部配置換(四月一日付)

位ノ花一郎(経済研究所事務長)は当研究所事務長(四月一日

付)

林屋辰三郎(前立命館大学教授)を教授(日本部)に採用(五月

一日付)

山田慶児(同志社大学助教授)を助教授(東方部)に採用(五月

一日付)

松尾尊允講師(日本部)・飛鳥井雅道助手(日本部)は助教に

昇任(各五月一日付)

福永光司助教授(東方部)は教授に昇任(六月一六日付)

一九七〇年九月二十五日 印刷  
一九七〇年一〇月一日 發行

非売品

著者並  
発行者

京都大学人文科学研究所  
京都市左京区北白川東小倉町一〇

印刷所

株式会社印刷 同 朋 舎

京都市下京区壬生川通五条南入